

小笠原諸島父島から発見されたヨナグニチビコメツキ

鈴木 互

〒 211-0031 川崎市中原区木月大町 6-1 法政大学第二高等学校生物科
(elater2003elater@yahoo.co.jp)

Notes on *Babadrasterius urabensis* (Coleoptera, Elateridae) Newly Discovered from Chichi-jima Island, Ogasawara Islands

Wataru SUZUKI

Summary. *Babadrasterius urabensis* Ôhira, 1994 is one of the common elaterid beetles distributed in the Ryukyu Islands and the northern part of Kyushu Island, Japan. However, this species has never been recorded from outside of these areas. In this short report, the author recorded it from Chichi-jima Island of the Ogasawara Islands for the first time and suggested the possibility that this species could be brought artificially from the Ryukyu Archipelago to Chichi-jima Island along with seedlings of agricultural crops.

ヨナグニチビコメツキ *Babadrasterius urabensis* Ôhira, 1994 は、与那国島の宇良部岳で採集された雄個体を完模式標本として命名記載された種で、副模式標本の産地として他に与論島や沖縄島があげられている。その後は各地から記録され、伊平屋島、西表島、波照間島、新城島、石垣島、宮古島、渡嘉敷島、伊計島、沖永良部島、屋久島そして長崎市などにも分布することが明らかにされている(岸井, 2006; 北村, 2007; 高桑・藤田, 2010; 大平, 1996, 2002, 2011; 大平・楠井, 2005; 今坂・阿比留, 2012; 楠井・宮城, 2013; 山崎ほか, 2016; 鈴木, 2018)。

筆者は、東京都の山崎裕志氏从小笠原諸島父島で採集されたコメツキムシの同定を依頼されたが、その中にこれまで小笠原諸島から記録のなかった本種を見いだしたので、ここに報告する。

報文をまとめるのにあたり、貴重な標本をご提供いただいた山崎裕志氏と斉藤昌弘氏、本種の分布についてご教示いただいた大平仁夫博士、関係する文献をご紹介いただいた青木一幸氏、石澤尚史氏、今坂正一氏と松本俊信氏、和名についてご意見をいただいた渡辺昭彦氏に厚くお礼申し上げます。

Babadrasterius urabensis Ôhira, 1994

ヨナグニチビコメツキ (Figs. 1-4)

Babadrasterius urabensis Ôhira, 1994: 224, 230-231 (Yonaguni-jima Is., Okinawa hontô Is., Yoron Is.).

検視標本: 1 ♀ (Figs. 1, 3 & 4), 東京都小笠原諸島父島西町, 15. VII. 2018, 山崎裕志採集・筆者保管; 1 ♂ (Fig. 2), 同地, 6-15. X. 2018. 山崎裕志採集・筆者保管。共に、外灯の見回りをした際に得られ



Figs. 1-4. *Babadrasterius urabensis* Ôhira, from Chichi-jima Is. 1, dorsal habitus, female; 2, male genitalia; 3, punctures on the central portion of pronotum, female; 4, left posterior angle of pronotum, female.

たものである。

比較標本: 219 exs., 沖縄県与那国島宇良部岳, 28-30. III. 1996, H. Kaneko leg. 筆者保管。

本種の和名について

本種の和名については、大平 (1994) により記載された際、和文記載の部分では“ヨナグニチビコメツキ”，英文記載の部分では“Urabe-chibi-kometsuki”と異なる表記がされた。その後、大平は、宮古島、沖永良部島、渡嘉敷島、波照間島から本種を記録する際、和名をウラベチビコメツキとしたが (大平, 1996, 1997, 1999), Kishii (1999) は、日本のコメツキムシをまとめたチェックリストにおいて、大平 (1996) の処理に従ってウラベチビコメツキとしたことから、その後は、多くの著者がこの和名を使用している (大平・松尾, 2000; 高桑・藤田, 2010; 岸井, 2006; 今坂・阿比留, 2012; 楠井・宮城, 2013)。しかし、一方では、ヨナグニチビコメツキの和名も使われ続けている (大平, 1996, 1997, 1999a, 1999b; 大平・楠井, 2005)。

二つある和名のうち、ヨナグニチビコメツキは、ホロタイプの産地である与那国島にちなむものであり、もう一方のウラベチビコメツキは、産地の「宇良部岳 (うらぶだけ)」を基にした学名「*urabensis*」にちなむものである。ともに、産地に由来する和名であるが、ウラベチビコメツキの和名は、同様に南西諸島に広く分布するエラブミナミチビコメツキ *Nanseia erabuensis* (Kishii, 1966) と和名が酷似しており、とても紛らわしい。そこで、和名による今後の混乱を避けるため、Ôhira (1994) により原記載で最初に提唱された“ヨナグニチビコメツキ”を今後は用いていくことをここで提案したい。

分布について

本種の分布について、今坂・阿比留 (2012) は、「多分対馬海流沿いに琉球～九州西岸まで広く分布しているのでであろう」と述べている。本種と同様の分布模様を持つものに、ケシツブスナサビキコリ *Rismethes ryukyuensis* Ôhira があるが、いずれもどのように分布を広げていったのか興味を引く。

今回、南西諸島に分布するこのコメツキムシが遠く離れた小笠原諸島から発見されたことはとても意外であった。昆虫の中には、琉球列島と小笠原に共通に生息する種が存在するので、そのこと自体は珍しいことではないが、自然分布と思われる昆虫は、幼虫などが材に入る潜材性の昆虫がほとんどである。本種の幼虫は未知であるが、本種が含まれるチビコメツキの仲間の幼虫は、土壌中や砂礫中に生息することが明らかにされている (大平, 1994)。本種も他のチビコメツキの成虫と同じように草地や荒地を生活環境として好むことから、幼虫は土壌中や砂礫中に生息する可能性が高

い。そう考えると、本種の成虫や幼虫が海水の影響を受けずに漂流物などと共に南西諸島から小笠原諸島へ運ばれた可能性は低い。自力飛行による移動や、気流により運ばれた可能性は、小笠原諸島は南西諸島から 1,000 km 以上も離れていることや、南西諸島と小笠原諸島の間を埋める地域や伊豆諸島から本種の記録がまったくないことから極めて低い。可能性として高いのは、人為的なものである。南西諸島から園芸植物や農作物が小笠原に持ち込まれた際、土壌と共に本種の幼虫も持ち込まれたか、成虫が物資と共に運ばれたというものである。前者については、1899 年に沖縄からリュウキュウマツが持ち込まれたことにより移入したのではないかと推測されるウバタマコメツキの例がある (大平・楠井, 1975)。大林 (2016, 2017) は、小笠原で調査をおこなった農業者の半数が沖縄などからマンゴーの苗を導入していることを明らかにした。また、実際に苗を沖縄の業者から取り寄せて調べたところ、9 割以上の苗から生きている生物 (アブラムシ、アリ、ミミズ、ジムカデ等) が検出され、そのうちの約 9 割が土壌部分から検出されたと報告している。大林 (2016, 2017) の調査では、コメツキムシの幼虫が検出されていないが、多くの農業者がこれまでに苗を島外から導入していることを考えると、このような形で苗の土壌と共に小笠原に入った可能性があるのではないかと考えられる。農業者を対象としたアンケート調査によると、今後も引き続きマンゴーなどは島外からの導入を考えているとしており、このような形で多くの昆虫が小笠原諸島に持ち込まれる可能性が高いように思われる。

今回検視することができた個体は、7 月と 10 月の 2 回の調査で、港に近い灯火で得られたものである。現時点で発見された個体数は 2 個体と少ないが、すでに父島に定着している可能性はある。走光性があることから、停泊した船のライトに引き寄せられて、短時間で寄港できる島であれば移動する可能性もある。小笠原諸島での分布拡大には注意していきたい。

識別点について

日本に生息するチビコメツキの仲間は、整理するとこれまでに、7 属 12 種 3 亜種が知られている (大平, 1994; Kishii, 1999; Arimoto *et al.*, 2015; 鈴木, 2018) が、どれも体形がよく似ており、斑紋の有無やその形状も変異が多く、その識別には注意が必要である。今回父島で採集されたヨナグニチビコメツキも通常存在する斑紋が消失し、一見、

エラブミナミチビコメツキ *Nanseia erabuensis* (Kishii, 1966) や斑紋が消失したイリオモテチビコメツキ *Prodrasterius collaris asaokai* Ôhira, 1994 を思わせる個体であった。しかし、前胸背板には大小2種類の点刻で被われ、点刻間は滑らかで光沢を放つこと (Fig. 3)、後角には1本の明瞭な隆起線を備えること (Fig. 4)、そして前胸腹板線先端部に浅い凹溝がないことから本種と同定した。なお、念のため、父島産の雄とホロタイプの産地である与那国島の宇良部岳産の雄個体の交尾器を比較したが、双方に両者を明確に区別できる形態上の違いは認められなかった。

引用文献

- Arimoto, K., T. Tsukada, & H. Arimoto, 2015. Review of the genus *Heteroderes* Latreille in Japan (Coleoptera: Elateridae: Agrypninae). *Japanese Journal of systematic Entomology*, 21: 345–350.
- 今坂正一・阿比留巨人, 2012. 長崎山彦山とその周辺の甲虫類 (2009–2010). 英彦山虫取り散歩で得られた甲虫の季節変動など. こがねむし, (77): 37–58.
- 岸井 尚, 2006. 細川浩司氏蒐集の邦産コメツキムシ. 地域甲虫自然史, (2): 1–89.
- 楠井善久・宮城秋乃, 2013. 地表性コメツキムシ3種の食性の観察. さやばねニューシリーズ, (12): 57–58.
- 大林隆司, 2016. 世界自然遺産登録地に適した侵入病害虫等管理技術の検討 ～小笠原 (父島, 母島) 島外からの購入苗から検出された生物類～. 世界自然遺産地域小笠原諸島 新たな外来種の侵入・拡散防止に関する検討の成果と今後の課題の整理 (科学委員会下部 新たな外来種の侵入・拡散防止に関するワーキンググループ), 参考資料 5. file:///C:/Users/elate/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/UPA6AVEU/challenge_invasive%20alien%20species_3%20(1).pdf
- 大林隆司, 2017. 小笠原 (父島, 母島) 島外 (沖縄本島) からの購入苗から検出された生物類. 日本生態学会第64回全国大会 (2017年3月, 東京) 講演要旨. 一般講演 (口頭発表) C01-03. <http://www.esj.jp/meeting/abst/64/C01-03.html>
- 大平仁夫, 1994. 日本産チビコメツキ亜科の属・種について. 越佐昆虫同好会特別報告, (2): 217–234.
- 大平仁夫, 1996. 琉球 (宮古島・与那国島) のコメツキ採集記. 北九州の昆蟲, 43: 29–32.
- 大平仁夫, 1997. 沖永良部島のコメツキムシ採集記. 北九州の昆蟲, 44: 151–153.
- 大平仁夫, 1999a. 波照間島のコメツキムシ採集記. 北九州の昆蟲, 46: 14–15, pl. 5.
- 大平仁夫, 1999b. 渡嘉敷島・座間味島のコメツキムシ採集記. 北九州の昆蟲, 46: 121–123, pl. 19.
- 大平仁夫, 2011. 栗原桂一・春江夫妻の採集品に基づくコメツキムシ類の記録 (2). 一石垣島・西表島一. さやばねニューシリーズ, (4): 17–18.
- 大平仁夫・松尾照男, 2000. 松永斎大氏採集の沖縄本島産コメツキムシ類. 北九州の昆蟲, 47: 105–115.
- 大平仁夫・楠井善久, 1975. 小笠原諸島のコメツキムシについて. *Elytra*, Tokyo, 2: 17–21.
- 大平仁夫・楠井善久, 2005. 琉球列島小島嶼のコメツキムシ (2). 月刊むし, (412): 32–33.
- 鈴木 茂, 2018. 日本列島の甲虫全種目録. <https://japanesebeetles.jimdo.com/> 2018年9月30日閲覧.
- 高桑正敏・藤田 宏, 2010. 屋久島高地帯花之江河周辺における昆虫調査. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (39): 35–38.
- 山崎仁也・松村雅史・吉田和久・力身恭二・目黒賢児, 2016. 鳩間島・新城 (上地) 島・黒島の動物相 (FAUNA) —昆虫相を中心に. 沖縄県立博物館・美術館 博物館班編, 2016 (2015). 鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書 2016: 69–80. 沖縄県立博物館・美術館博物館班, 那覇.

(2019年9月24日受領, 2019年12月10日受理)

【短報】日本産ガムシ科の1新種と和名新称

筆者は順次刊行中の日本産昆虫目録の執筆依頼を受けた際、北方四島産の昆虫は当然日本産種としてリストアップすべし、との指示を受けた。現在如何なる方針で昆虫目録の編纂が進んでいるかは定かでない。最近、筆者を共著者の一人として、ガムシ科ハバビロガムシ亜科ケシガムシ属 (*Cercyon* 属) の1新種が国後島より記載された (Ryndevich *et al.*, 2019)。原記載論文では、この1新種の分布は「極東ロシア」と書かれている。この扱いは筆者の立場としては相容れないものではあるが、政治を科学の場に持ち込むことを避け、うやむやにした経緯がある。本稿にて、この1新種を日本産種として既に「記載済み」であることを報告するとともに、和名を新しく与えることとしたい。

和名新称: クナシリケシガムシ

Cercyon (*Cercyon*) *sundukovi* Ryndevich *et al.*, 2019
分布: 北海道 (国後島)。

引用文献

- Ryndevich, S. K., H. Hoshina, & A. A. Prokin, 2019. Review of species of the genus *Cercyon* of Russia and adjacent regions. VI. Subgenus *Cercyon*, the *C. shinanensis* group (Coleoptera: Hydrophilidae). *Zoosystematica Rossica*, 28: 258–266.

(保科英人 910–8507 福井市文京 3–9–1

福井大学教育学部)